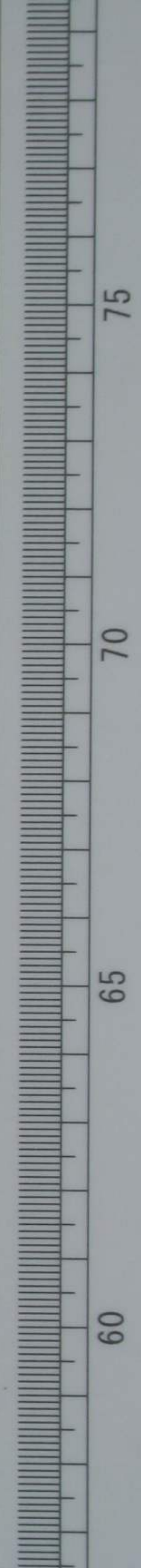




𐤀𐤃𐤓𐤏

白羊宮





△  
羊  
宮



大正三年

西文







薄田淳介作

白羊膏

東都

金尾文淵堂藏版



この書を後藤寅之助氏にささぐ

藤  
 寅  
 之  
 助  
 氏  
 之  
 書  
 目  
 次



巻頭  
巻末

目次

わがゆく海 ..... 二  
 ああ大和にしあらししかば ..... 六  
 魂の常井 ..... 三  
 ひとづま ..... 一七  
 冬の日 ..... 二

目次

目次

三

二



零餘子 ..... 二七

鶉の歌 ..... 三四

望郷の歌 ..... 四二

金星草の歌 ..... 四八

夕聲 ..... 五五

師走のひと日 ..... 五九

妖魔『自我』 ..... 六五

日ざかり ..... 七五

笛の音 ..... 八一

鳩の浄め ..... 九二

をとめごころ ..... 九七

忘れぬまみ ..... 一〇〇

離別 ..... 一〇三

香のささやき ..... 一〇六

時のつぐのひ ..... 一〇九

美き名 ..... 一一〇

牧のおもひで ..... 一一三

くちづけ ..... 一二四

大葉黄堇 ..... 一二六

無花果 ..... 一二八



心げさう……………一三〇

わかれ……………一三三

幻なりき……………一三三

月見草の歌へる……………一三四

野菊の歌へる……………一三三

夢ざめしをり……………一三七

海のおもひで……………一四四

はこやなぎ……………一四七

難波うばら……………一五〇

白すみれ……………一五三

都大路……………一五六

希望……………一五九

聖り心……………一六〇

新生……………一六一

樹の間のまぼろし……………一六三

片かづら……………一六五

忘れがたみ……………一六六

枯薔薇……………一七一

戀のものいみ……………一七四

小木曾女の歌……………一七七



夏の朝……………一八一

さざめ雪……………一八六

烟……………一九一

寂寥……………一九三

隠り沼……………一九五

江林……………二〇一

睡蓮の歌……………二〇五

海のほとりにて……………二〇九

知らぬかなた……………二二三

夕とどろき……………二二六

涙の門をゆきすぎて……………二一九

朝顔姫の嘆き……………二二三

筑波紫……………二三〇

樂のすずろぎ……………二三三

藝の許され……………二三八

鈴蘭の歌……………二四一

三の百合……………二六三

雛罌粟……………二七〇

小雀と桂女……………二七一



挿書

わがゆく海……………満谷國四郎筆

鈴蘭……………鹿子木孟郎筆

○

○

○

○

白羊宮目次畢







目次

挿書

心がゆく海

鈴蘭

...

...

...

...

藤谷國四郎筆

鹿子木去郎筆

白羊宮目次畢



白  
羊  
宮



わがゆく海

わがゆくかたは、月明りさし入るなべに、  
 さはら木は腕だるげに伏し沈み、  
 赤目柏はしのび音に葉ぞ泣きそぼち、  
 石楠花は息づく深山、——「寂靜」と、

「沈黙」のあぐむ森ならじ。

わがゆくかたは、野胡桃の實は笑みこぼれ、  
 黄金なす柑子は枝にたわわなる  
 新墾小野のあらき畑、草くだものの  
 釀酒は小甕にかをる、——「休息」と、  
 『うまし宴會』の場ならじ。



わがゆくかたは、末枯の葦の葉ごしに、  
爛眼の入日の日ざしひたひたと、  
水鍔の面にまたたくに見ぞ酔ひしれて、  
姥鷺はさしぐむ水沼、——「歎かひ」と、  
『追懷』のすむ郷ならじ。

わがゆくかたは、八百合の潮ざるどよむ  
遠つ海や、——あゝ、朝發き、水脈曳の

神こそ立てれ、荒御魂、勇魚とる子が  
日黒みの廣き肩して、いざ『慈悲』と、  
『努力』の帆をと呼びたまふ。



ああ大和にしあらましかば

ああ大和にしあらましかば、

いま神無月、

うは葉散り透く神無備の森の小路を、

あかつき露に髪ぬれて往きこそかよへ、

斑鳩へ平群のおほ野高草の

黄金の海とゆらゆる日、

塵居の窓のうは白み日ざしの淡に、

いにし代の珍の御經の黄金文字、

百濟緒琴に齋ひ瓮に彩畫の壁に

見ぞ恍くる柱がくれのたたずまひ、

常花かざす藝の宮齋殿深に、

焚きくゆる香ぞ、さながらの八鹽折

ああ大和にしあらましかば



美酒の甕のまよはしに、

さこそは酔はめ。

新墾路の切畑に、

赤ら橘葉がくれに、ほのめく日なか、

そことも知らぬ静歌の美し音色に、

目移しのふとこそ見まし、黄鶉の

あり樹の枝に、矮人の樂人めきし

戯ればみを、尾羽身がろさのともすれば、

葉の漂ひとひるがへり、

籬に、木の間に、——これやまた野の法子兒の

化のものか、夕寺深に聲ぶりの、

讀經や、——今か、静こころ、

そぞろありきの在り人の

魂にしも泌み入らめ。



日は木がくれて、諸とびら

ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、

そそ走りゆく乾反葉の

白膠木榎棟名こそあれ、葉廣菩提樹、

道ゆきのさざめき、諳に聞きほくる

石廻廊のたたずまひ、振りさけ見れば、

高塔や、九輪の鏝に入日かけ、

花に照り添ふ夕ながめ、

さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし、

そのかみの學生めきし浮歩み、

ああ大和にしあらましかば、

今日神無月、日のゆふべ、

聖ごころの暫しをも、

知らましを、身に。



魂の常井

ああ野は上じらむ曙の  
 ゑわらひ浮歩む童女さび、  
 瑞木の木がくれに、花小草、  
 莖葉の下じめり香を高み、

朝踏む陰路の行ずりに、  
 若ゆる常夏の邦あらば、  
 往かまし、わが心葉がらみに、  
 くれなる、燃ゆる火の花と咲かめ。

ああ世に、しるがねの高御座、  
 美酒の香ぞにほふ御座の間に、  
 立ち舞ふ八少女の入綾や、



樂所のをんな樂筥篋の音の  
どよみよ、大海の浪とゆる  
夜ながを、宴會うつ宮あらば、  
ゆかまし、わが心醉さまに、  
はえある歌ぬしの名をか得め。

ああ、日は、身隠れし宵やみの  
木立の息ごもり、氣をぬるみ、

林精は水鏡江に羽ぞ浸す  
静寂を、月しろの影青に、  
ほのめく氣深さや、空室に  
燈明の火ぞしめる寺あらば、  
ゆかまし、わが心夜ごもりに、  
天ゆく羽車や聞きつべき。

ああ、然は、野に、宮に、夜ごもりに、



あくがれまどひにし日はあれど、  
果しは野ごころの伸羽して、  
歸るや、なつかしき君が手に。  
たゆげの片ゑまひ、優まみの  
うるみよ、うら若き靈魂の  
旅路に熱れては、掬みつべき  
うべこそ、眞清水の常井なれ。

ひとつま

あえかなる笑や、濃青の天つそら、  
君が眼ざしの日のぬるみ、  
寂しき胸の末枯野につと明らめば、  
ありし世の日ぞ散りしきし落葉樹は、



また若やぎの新青葉枝に芽ぐみて、  
歡喜のはた悲愁のかげひなた、  
戯るる木間のした路に、美し涙の  
雨滴り、けはひ静かにしたたりつ、  
蹠やはき『妖惑』の風おとなへば、  
ここかしこ、『追懷』の花淡じろく、  
ほのめきゆらぎ、『囁き』の色は唐棣に、  
『接吻』のうまし香は霧の如、

くゆり靡きて、夢幻の春あたたかに、  
酔ごこち、あくがれまどふ束の間を、  
あなうら悲し、優まみの日ざしは頓に、  
日曇り、『現し心』の風あれて、  
花はしをれぬ、藥えし青葉は落ちぬ、  
立枯の木しげき路よ、ありし世の  
事榮の日は、はららかにそそ走りゆき、  
鷺脚の『嘆き』ぞ、ひとり青びれし



溜息低にまよふのみ。——夢なりけらし、

ああ人妻——

實にあえかなる優目見のもの果なさは、

日直りの和ぎむと見れば、やがてまた、

搔きくらしゆく冬の日の空合なりき。

冬の日

新嘗の祭り日なりき、

午さがり、曝れし河原に、

老御達「冬」こそたてれ、

身ぞたゆげに。



數<sup>かぞ</sup>へ日<sup>び</sup>のこころ細<sup>ほそ</sup>さや、  
涙<sup>い</sup>眼<sup>め</sup>なる日<sup>ひ</sup>のたたずまひ、  
物<sup>もの</sup>の影<sup>かげ</sup>、淡<sup>あは</sup>げに揺<sup>ゆ</sup>れて、  
うるみ色<sup>いろ</sup>に。

雲<sup>くも</sup>の襞<sup>ひた</sup>ほのかに鈍<sup>鈍</sup>み、  
空<sup>そら</sup>ひくに滑<sup>すべ</sup>るゆるかさ、

ありし世<sup>よ</sup>のおもひでぐさの

榮<sup>はえ</sup>、また、空<sup>く</sup>華<sup>け</sup>。

みだれ伏<sup>ふ</sup>す根<sup>ね</sup>じろ高<sup>たか</sup>萱<sup>がや</sup>、  
老<sup>おい</sup>しらむ末<sup>すえ</sup>葉<sup>は</sup>のそそけ、  
氣<sup>け</sup>を寒<sup>さむ</sup>み、失<sup>ひ</sup>聲<sup>こゑ</sup>かすけく  
音<sup>ね</sup>こそいため。



今し、日は思ひ消ゆらし、

面隠し、——うは曇りして、

夕時雨しのびに泣くや、

歎歎よよと。

かかる日よ、在巢の鳥も、

うらびれし目路の眺めに、

さへづりの徒音を絶えて、

俯居すらめ。

束の間や、——やがて日直り、

冬の日ほほほ笑みそめつ。

青じろき頬ぞ、鼻じろむ

面ほでり。

樹に、莖に、伏葉に、石に、



泣き濡れしうるほひ映えて

嘆かひの似るものもなき

うつくしさや。

日の心地、いまの憂身に、

そのかみの美き日をしのぶ

さびしさに、笑みし子ならで、

誰か解かめ。

零餘子

片びなた、醜家のかくれ、

蕪だかの老木にそひて、

頂かけり、蔓の手たゆき

零餘子かづら。



八少女の野の使ひ女に、  
身ぞひとり、ささやけ者や、  
葉がくれに、ああ聊かの  
實こそむすべ。

熟色の黄金覆盆子は、  
そら聖あかつら鶯

ひと日來て、啄ばみ去りぬ、  
酔のすさび。

核ぐみし茱萸は、端山の  
まめをとこ、栗鼠か拾ひて、  
小甕酒醸みもこそすれ、  
洞窟ふかに。



似ず、ひとり莖葉のしたに、

(隠り戀人こそ知らね)

實はむすび、實はまた熟えて、

蔓もたわに。

つむじ風、した葉の煽り、

あたふたと零餘子はこぼる。

ああ不祥、—— 荊高珠數の

珠のみだれ。

實は、さあれ底土にひそみ、

日にめざめ、濕りに吹眩び、

いつかまた芽生を伸して、

二代ゆかめ。

身ぞ小野の矮人ながら、



あけぼのの映、またありし  
夕ながめ、見こそ酔ひしか、  
數多がへり。

身の程のいささけ業に、  
許されの性は足ひぬ。  
ああ熟實、——わが世は落ちて  
またかへらじ。

秋収め、野田のせはしさ、  
敝履のはためきや、——いま、  
せつなさの唸囁ゆるに、  
葉こそ喘げ。



鶉の歌

うべこそ来しか、小林の

法子兒鶉

そのかみ、(邦は風流男の代にかもあらめ。  
豊明節會の忌ごるも、童男のひとり、

日蔭かづらや曳きかへる木のした路に、

葉染の姫に見ぞ婚ひて、生れにし汝、

黄櫨のうは葉はくれなるに、

また、榛實の虚の實は、根に落ち鳴りて、

常少女なる母宮の代としもなれば、

すずるありきや許されて、

さこそは獨り野木の枝に、

占問ひ顔にたたずみて、



初祖の人や待ちつらめ。

ひととせなりき、

春日の宮の使ひ姫秋ふた毛して、

竹柏の木の間をゆきかへる小春日和を、

都ほとりの秋篠や、

★『香の清水』は水錆びてし古き御寺の

頽廢堂の奥ぶかに、

技藝天女の御像の天つ大御身、

玉としにほふおもざしに、

美し御國の常世邊ぞ

あくがれ入りし歸るさを、

ふとこそ、荒れし夕庭の朽木の枝に、

汝が靜歌を聞きすまし、

心あがりのわが絃に、

然は緒合せに、ゆらぐ音の歌ぬしこそは、



うべ睦魂の友としも、  
おもひそめしか。

またひと歳は神無月、

日ぞ忍び音に時雨れつる深草小野の

柿の上枝に熟みのこる美し木酩、

入日に濡れて面はゆに紅らむゆふべ、

すずる歩きの行くすがら、

竹の葉山の雨滴りはらめく路に、

汝をひとり黄鶉の

黙の俯居をかいまみて、

\*ありし掛想のまれ人の

化か雨じめる野にくゆる物のかをりに、

そのかみの夜や思ひいでて、

涙眼に鳥は嘆くやと、

目ぞ留りにし。



ああ汝こそ、小林の

法子兒鷄、——人の世の往くさ來るさに、

ともすれば、まためぐり會ふ魂あへる子や、——

實にいささめの縁ながら、空華にはあらじ。

わが魂の小野にして、

『努力』の濕ひ「思慧」の影おほし齋きて、

さて咲きぬべき珍の花、

そのうら若き苔みこそ、

さは龕の戸と襟みつれ、

まだき滴る言の葉の美しにほひは、

生命の火をも齋はふまで、

香にほのめきぬ。

\*秋篠寺に香水堂あり常曉阿闍梨闍伽井の舊蹟なり

\*竹の葉山の下路は深草少將が通ひ路の舊蹟と傳へらる



望郷の歌

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、  
在木の枝に色鳥の咏め聲する日ながさを、  
物詣する都女の歩みものうき彼岸會や、  
桂をとめは河しにもに梁誇りする鮎汲みて、

小網の雫に清酒の香をか嗅ぐらむ春日なか、  
權の音ゆるに漕ぎかへる山櫻會の若人が、  
瑞木のかげの戀語り、壬生狂言の歌舞伎子が  
技の手振の戯ばみに、笑み廣ごりて興じ合ふ  
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、楠樹の若葉仄かに香ににほひ、  
葉びる柏は手だゆげに、風に揺ゆる初夏を、



葉洩りの日かげ散斑なる糺の杜の下路に、  
 葵かづらの冠して、近衛使の神まつり、  
 塗の轅の牛車、ゆるかにすべる御生の日、  
 また水無月の祇園會や、日ぞ照り白む山鉾の  
 車きしめく廣小路祭物見の人ごみに、  
 比枝の法師も、花賣も、打ち交りつゝ、頽れゆく  
 かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、赤楊の黄葉ひるがへる田中路、  
 稻搗をとめが静歌に黄なる牛はかへりゆき、  
 日は今終の目移しを九輪の塔に見はるけて、  
 静かに瞑る夕まぐれ、稍散り透きし落葉樹は、  
 さながら老いし葬式女の、懶げに被衣引延へて、  
 物嘆かしたたずまひ、樹間に仄めく夕月の  
 夢見ごこちの流盼や、鐘の響の青びれに、  
 札所めぐりの旅人は、すゞる家族や忍ぶらむ



かなたへ君きみといざかへらまし。

わが故郷ふるさとは、朝凍あさじみの眞葛まぐつが原はらに楓かへての葉は

そそ走はしりゆく霜月しもつきや、専修せんじゆ念佛ねんぶつの行者ぎやうらが

都みやこ入りする御講おこう風かぜぎ、日は午ひるさがり、夕ゆふ越この

路みちにまよひし旅心たびこころ地物ものわびしらの涙眼なみだめして、

下京しもぎやうあたり時雨しぐれする、うら寂さびしげの日短ひみじかを、

道みちの者ものなる若人わかひとは、ものの香朽かぐちし經藏きやうざうに、

塵居ちりゑの御影おみかげ、古渡こわたりの御經おみきやうの文字もじや愛あいしれて、

夕ゆふくれなるの明あからみに、黄金こがねの岸きしも慕しづふらむ

かなたへ君きみといざかへらまし。



金星草の歌

一

そのかみ、山の一日に、草木はなべて、

ああ金星草、

色ゆるされの事榮に笑みさかゆるを、

ああひとつば、

ひとり空手に、山姫の宣をこそ待て、

ああひとつば。

二

春は馬酔木に、蝦夷莖かざしぬ、花を。

ああひとつば、

装ひ似ざるうれたさに、宮にまゐりて、



ああひとつば、

願へど、姫は事なしび、素知らぬけはひ、

ああひとつば。

三

夏は山百合、難波薔薇香にほのめきぬ、

ああひとつば、

匂ひ香なきにうらびれて、一日は洞に、

ああひとつば、

嘆けど、姫は空耳に片笑みてのみ、

ああひとつば。

四

秋は茴香、えび蔓實ぞ色づきつ、

ああひとつば、

素腹の性を恨みわび、夜を泣き濡れて、



ああひとつば、

萎ゆれど、姫は目も空に往き過ぎましぬ、

ああひとつば。

五

やがて葉は散り、實は朽ちぬ。冬木の山に、

ああひとつば、

獨りし居れば、姫は來て「思ひかあたる、

ああひとつば、

世は吾とわが知るにこそ、在りがひはあれ。」

ああひとつば。

六

姫は微笑み、「今日もはた、香をか羨む、

ああひとつば、

色をか、いかに、齋ひ子の斯くや、御賜。」と



ああひとつば、

その日ひよりこそ、黄金斑こがねいばの紋葉いづはとはなれ、

ああひとつば。

夕ゆふごごゑ

日ひは暮くれぬ野のの面低おもひに、

霧きりはくゆるたゆげさの、

齋いみ精進まろじ懺悔くわいのひと夜よ、

思おもひしづむ魂たまならし。



夕晴の黄金路に、

かへる鳥の遠がくれ、

胸の汚染、ひとつ消えて、

今はた、二のうするかに。

葉ずくなの並木なかに、

『静ころ』の浮歩み、

木木の枝しぬに垂れて、  
われかの様に息づきぬ。

いま雲の夕くれなる、

天照る日の大殿に、

をんな樂かへり聲の

ほのにひびく夢ごこち。



浄きよまはる魂たまの深ふかみ、  
聖ひじりごころととのひて、  
美うまし音ねのさこそ響とよむ  
日ひのあなたに往ゆかまほし。

師走\*の一日

一

み冬ふゆとなりぬ、日暮ひぐれぬ、  
ひねもす森もりにあらびし  
脚早あしはやの野分のわきは、うしろ寒さむに、  
そそけの髪かみもみだれて、



北山あたりいそぎぬ。

もとあら木立の落葉林、

木の息ごもりたゆげに、

残りの葉こそは風にあへげ。

二

澄みつる空や、さながら

ありにし戀も忘れて、

菩提樹がくれの法の苑に、

「無漏慧」にあそぶ聖の、

とわたる鳥のありなし、

いささの染をもえは許さぬ

齋戒か、——嚴の清まりは、

見るだに堪へせじ、現しごころ。

三



あな大日枝の額に、

玉冠する夕日の

光や、天なる美し眼ざし、

東へ、ゆるるに峰越の

淡雲すべる静けさ、

これやは終なる魂のひと日、

すずるに心ゆらぎて、

ありしを忍ぶる美き名ならし。

四

束の間なりき、夕ばえ、

今はた灰にうすれぬ。

さて日は葬式の鈍に暮れて、

眞闇の墓に入るらめ。

この静かなる臨終に、

吾や看護婦の心しりに、



日の物深さしのびて、

祕密のころも辿らまほし。

※洛東下岡崎の里より

大比叡の方を眺めてよめる

妖魔『自我』

—

妖こそ見しか立枯の木繁き木原、

色鳥はさしぐむ路の奥ぶかに、

ひともと青木木叢なる廣葉のかくれ、

黄金なす鈴生の實をなつかしみ、



熟みつはりたるひと房を摘みにし日なり、  
矮人の黒染すがたつと見えて、

『あな許されぬ慧の實を、』と私語低に、

面隠し、目ぶかに被衣うちまとひ、

持杖の音ほとほと、木のした路を、

見え隠れ、鷺脚にこそ辿りしか。

二

妖にそ見しか、姫百合は木暗に俯居、

石楠花は日向に夢む花苑に、

あえかの人と相曳の日のしづけさを、

囁きは細蜂の羽とひるがへり、

うまし言葉は清酒の露としたみて、

酔心地、愛でのまどひを、——あな託し、

生目とまりし、苧垂の裾うちはへて、

木がくれに奥寄る人の後姿に、



頂うながくる手ては解とけたるみ、ふくる心こころの  
氣けをさむみ、身みは物もの怖おそに竦すくまりき。

三

妖まろこそ見みしか、午ひるさがり日ひぞ照てりあかり、  
美うまし香かはほのかに薰くゆる新あたら館かた、  
一いちの樂がく所ところにかきならす眞ま玉たま唐から琴こと、  
立たち樂がくの色いろ音ねは浪なみのたかまりに、

心こころあがりの面おもてほでり、とりゆの半なかば、

風かぜ流なが男をとこや、紅あか顔かほ嬢むすめ子の間あひだの座ざに、

異ことよそほひの長ながすがた童こども男をとこのひとり、

弱よわ肩かたの藤ふじ衣ぎのやつれに見み惱なやみて、

押おし手ては梁はりのくづれ鮎あゆさみだれ落おちて、

緒いと合あせの調しらべの糸いとぞなか絶たえし。

四



妖こそ見しか、御燈の火はねむたげに、

華籠の花吐息かすけき古寺に、

夕座まゐりの在り人は罷りし夜はを、

身ぞひとり齋居精進の籠り居に、

思ひ恍けてし常世邊の、美し黄金の

嚴の苑、天つ少女の相舞に、

見しは、頭白のねび御達、あな時のまに、

なよびかの姫は隠れて、唯ひとり

墳墓の如立ち残るものわびしさに、

胸騒ぎつとまぼろしは覺めはてき。

五

妖こそ見しか、水無月の祭のひと日、

往き軋む飾車の山鉾に、

日ぞ照りしらむ日盛りの都大路を、

人なだれ、祭物見の大衆に、



また見ぬ鈍の衣かづき他こそ知らね、  
不毛地の野にも往くかのうらびれに、  
打附ごころ、小走りに追ふとはすれど、  
物の怪は絶えずかなたに前ゆきて、  
えこそ及ばね、足惱みぬ、ああ息詰むと、  
道のべに、身ぞしだらなに倒れにし。

六

こよひ熱るる病臥の惱みのもなか、  
世はとみに鴉羽いろの焔して、  
蕩けたゆたふ火の海に、吾や落葉の、  
左視右顧、ゆくへも知らぬ途すがら、  
ふと遠方に目馴てし人がたち見て、  
直みちに追ひすがりつゝ、失聲して、  
『君よ』と呼べば、立ちどまり、振向き様に、  
『見惱ひの時こそ來れ。』と脱ぎすべす



被衣かきのひまに見入みいるれば、あな『我われ』なりき、  
驚駭おどろに胸むねはふたぎぬ、危篤あつしれぬ。

日ざかり

季ときは夏なつなか、

日ひぞ真晝まひる、

日ひざしは麥むぎの

穂ほにしらみ、



野のなかの路みちに

またたきて

濁しろ酒うまの如ごと、

湧わきたちぬ。

牧まきの小を野のには、

並なみ木こ立たち、

腕かひでだるげに

葉はを垂たれつ。

青あへぶくれなる

水み鏡さか沼ぬは、

めまぐるしさに、

息いきだえぬ。

雲くものひとひら、

たよたよと



唵<sup>あざと</sup>囁<sup>ささ</sup>ひゆきて、

ありなしに、

やがては消<sup>き</sup>えつ。

濃<sup>こ</sup>青<sup>あを</sup>なる

空<sup>そら</sup>や、虚<sup>うつろ</sup>なる

墓<sup>ぼか</sup>ならし。

水<sup>み</sup>の面<sup>おもて</sup>の水<sup>みづ</sup>澁<sup>しぶ</sup>

氣<sup>け</sup>をぬるみ、

蝶<sup>み</sup>蝶<sup>り</sup>は涅<sup>くろ</sup>に

くぐり入<sup>い</sup>り、

爐<sup>ほ</sup>土<sup>つち</sup>の香<sup>か</sup>に

息<sup>いき</sup>むせて、

蛇<sup>へび</sup>はひそみぬ、

葉<sup>は</sup>がくれに。



なべての上うへに

高照たかす

巖いづの噴こぼや、

あな寂さびし、

悔くひなき魂たまの

けだかさは、

げに水み無な月づきの

日ひならまし。

笛ふえの音

生命いのちの路みちのもろ側がはに聳たぎやぎ立たてる

『かなしび』の女め木ぎ『よろこび』の男おとこ木ぎ、

今宵こよひさしぐむ月つき代しろのままの濕うるみに、

すずろに木こ靈たまうらびれて、



天あめの幸さき夜よにあくがるる沈も黙たの深ふかみを、

笛ふえの嘆なげきの音ねをいたみ、

上うば枝えそよるに囁ささやきて散ちりこそまがへ、

二ふた木きの落おち葉はほろほるに。

『日ひ影かげにしめらへる

『かなしび』の

一ひと片へは黄き朽くち葉はの

色いろに染しみ。』

『日ひ向むかひにひるがへる

『よろこび』の

一ひと片へは緑みどり葉はの

香かににほふ。』

『ああ、わが故ふる郷さとは



聖<sup>ひじ</sup>り世<sup>よ</sup>の

沈<sup>しじま</sup>黙<sup>ま</sup>ぞ、齋<sup>いも</sup>居<sup>み</sup>する

嚴<sup>いづ</sup>の苑<sup>その</sup>。』

『また、わが本<sup>みま</sup>宮<sup>みや</sup>は、

筥<sup>く</sup>篋<sup>こ</sup>の音<sup>ね</sup>の

緒<sup>を</sup>合<sup>あ</sup>せ、うちどよむ

美<sup>うま</sup>し國<sup>くに</sup>。』

『そこしも、黄<sup>こ</sup>金<sup>かね</sup>なす

『慧<sup>え</sup>』の實<sup>み</sup>はた

木<sup>こ</sup>ぐらき無<sup>む</sup>憂<sup>う</sup>華<sup>け</sup>樹<sup>じゆ</sup>の

葉<sup>は</sup>のにほひ。』

『かしこよ、狹<sup>さ</sup>丹<sup>に</sup>づらふ

『愛<sup>あひ</sup>』の花<sup>はな</sup>、



『努力』の常烽火、

日の光り。』

『そこしも、齋き女の

小忌ごろも、

蠟の火、黄金文字、

偈のけはひ。』

『かしこよ、八少女の

をんな樂、

盃誓、さざめ言、

白酒の香。』

かなたへ、——忌精進、

夜ごもりに、

今はた歸るべき



羽』といへば、

また言ふ『かかる夜を、

宴會うつ

かなたへ、——いざ、朱の

赭舟を。』

『苑には、領す神

名こそあれ、

畏こし、あな天の

『あくがれ』女。』

『宜こそ、いまそがる

國つ神、

尊とし、名は天の

『あくがれ』男。』



色音は絶えつ、——酔ひざまの心あがりには、

さざめき散りし翻れ葉は、

糸絡みせし舞の羽のつと舞ひさして、

噤みぬ下に落ち敷きぬ。

生命の路に、雌鳥羽にはた雄鳥羽に、

唇觸れあひて相寝ぬる

伏葉の亂れ、魂合へる美し睦びに、

月は夜すがら見ぞ惚けぬ

\*秋の末つ方月の一夜洛東華頂山  
境内に笛の音をききて咏める



鳩の浄め

夏なかの榮えは過ぎぬ、  
 くたら野の隠れの古沼、  
 『静寂』は翼を伸して  
 はぐくみぬ、水のおもてを。

鳩や、實に浄めの童女、  
 尼うへの一座なるらし。  
 なづさひの羽きよらかに、  
 水み泥どろなす水み澁しみに浮うきつ。  
 水み漬づく葉はの眞ま菰こものみだれ、  
 伏ふ葦あしの臂ひぢのひかがみ、



末枯<sup>うら</sup>や、——さてしも齋<sup>いひ</sup>場<sup>ば</sup>、

おもむろに鳩<sup>は</sup>は滑<sup>すべ</sup>りぬ。

漁<sup>うし</sup>人の沓<sup>くつ</sup>のおとにも、

鼻<sup>はな</sup>じろみ、面<sup>おも</sup>隠<sup>かく</sup>す兒<sup>こ</sup>の

振<sup>ふ</sup>りかへり、かつ涙<sup>なみだ</sup>ぐみ、

水<sup>み</sup>がくれにつとこそ沈<sup>しづ</sup>め。

河<sup>かう</sup>骨<sup>ほね</sup>の夏<sup>なつ</sup>を夢<sup>ゆめ</sup>みて、

ほくそ笑<sup>え</sup>む水<sup>みづ</sup>底<sup>そこ</sup>の宮<sup>みや</sup>、

潜<sup>かづ</sup>ぎ姫<sup>ひめ</sup>、『歸<sup>き</sup>依<sup>え</sup>』の掬<sup>く</sup>むなる

常<sup>とこ</sup>若<sup>わか</sup>の生<sup>いの</sup>命<sup>のち</sup>湛<sup>た</sup>ひぬ。

見<sup>み</sup>ず、暫<sup>しばし</sup>時<sup>じ</sup>、——今<sup>いま</sup>はた浮<sup>う</sup>きつ、

淨<sup>きよ</sup>まはる聖<sup>ひじり</sup>ごころの

かひがひし、あな鳩<sup>は</sup>の鳥<sup>とり</sup>、



日ひねもすに齋いっきゆくなり。

をとめごころ

一

黄こ金が覆い盆ち子ごは葉はがくれに、

眼まなこうるみて泣なきぬれぬ。

青あざ水み無な月づきの朝あさ野のにも、

嘆なげきはありや、わが如ごとく。



二

幸も、希望も、やすらひも、  
 海のあなたに往き消えつ。  
 この世はあまりか廣くて、  
 をとめ心はありわびぬ。

三

朝踐む風のささやきに、  
 覆盆子のまみは耀きぬ。  
 神はをとめを路しばの  
 片葉とだにも見給はじ。



忘れぬまみ

一

夏野の媛の手にとらす  
しろがね籠ももくさの  
香には染むとも、追懐は  
人のまみには似ざらまし。

二

伏目にたたすあえかさに、  
ひと日は、白き難波薔薇、  
夕日がくれに息づきし  
津の國の野を思ひいで。

三



ひと日は、うるむ月の夜に、  
水漬く磯根の葦の葉を、  
卯波たゆたにくちづけし  
深目の浦をおもひいでぬ。

離別

—

別れは、小野の白楊、  
夕日がくれに落つる葉の  
長息よ、繁にうらびれて、  
さあれ、静かに離れゆきぬ。



二

かたみの路みちの足あし憊なほみに、  
 思おもひしををれて弛なほむ日は、  
 美うらくしかりしそのかみの  
 事こと榮はえにしもなぐさまめ。

三

愛めでのさかりに、何なに知らず、  
 この日ひも、やがてありし世よの  
 往ゆきてかへらぬ追お懐ひてと、  
 消きゆらめとこそ思おもひしか。



香のささやき

一

この夕ぐれの静けさに、  
 魂はしのびに息づきて、  
 何とはなしに、おもひでに、  
 二つの花の香を嗅ぎぬ。

二

ひとつは、濕める梔子の、  
 別れのゆふべ泣き濡れし  
 あえかの胸に、今もはた、  
 『日』は残らめとささやきつ。

三



ひとつは、薫ゆる野茨の、  
今は末枯れぬ、そこにして、  
また新しき『日』は芽ぐみ、  
花もぞ咲くとつぶやみつ。

時のつぐのひ

時はふたりをさきしかば、  
また償ひにかへりきて、  
かなしき創に、おもひでの  
うまし涙を湧かしめぬ。



美き名

今日しも、卯月宵やみに、  
十六夜薔薇香ににほふ。  
なつかしきもの、胸の戸に、  
黄金の文字の名ぞひとり。

神はをとめを召しまして、  
いづくは知らず往にしかど、  
大御心のふかければ、  
残る名のみは消しませね。



牧のおもひで

夕月ゆづきさしぬ、野のは凍しみぬ、  
日ひのいとなみに倦うみはてて、  
苜かりし小草くさに倒たれ伏ふし、  
別わかれし人ひとの身みぞおもふ。

さても、眞ま晝ひるを玉たま敷しきの  
御苑みそのにたたす君きみなれば、  
夜半よにはかかるくたら野のに、  
すずろ歩あきもし給たまひぬ。



くちづけ

今朝あけぼのの浦にして、  
 われこそ見つれ、面ほでり、  
 濃青の瞳子、ひたひたの  
 み空と海の接吻を。

君や青空、われや海、  
 ああ酔心地、擁しめに  
 胸ぞわななく、さこそ、かの  
 か廣き海も、顛ひしか。



大葉黄すみれ

人待つ宵を、日のかたみ、

大葉黄堇花さきぬ、

愛での盛りに、言ひ知らず、

物さびしさの身にぞ泌む。

花とをみな持てなやむ

悲びな來そ、天つ日の

ながながし齡に唯ひと日、

今日に酔ふなる身のふたり。



無花果

葉こそこぼるれ夏なかの  
 青水無月のかげに見し  
 その日の夢はまづ覺めて、  
 今日<sup>けふ</sup>はた汝<sup>いまし</sup>——ああ無花果<sup>いちじゆく</sup>。

昨日<sup>きのう</sup>ぞ夕<sup>ゆふ</sup>に、あかつきに  
 露<sup>つゆ</sup>けかりつる身のふたり、  
 明日<sup>あした</sup>を、天<sup>あめ</sup>なる大御手<sup>おほみこて</sup>に  
 委<sup>かた</sup>ぬるも、はた、——ああ無花果<sup>いちじゆく</sup>。



心げさう

霜月ひと日、朝戸出に、小野の木守は、  
 荊高膚の阿利襪樹の根に散りほひし  
 實のあり數に驚きて、つと立ちかへり、  
 目無し籠を後ろ手にふた行くごとく、

ただ目に人を見し時は、なよび姿の  
 耀ひわたる清らさに、戀は退りて、  
 ふくろ心の奥ぶかに隠るとせしが、  
 落ちゐて、やがて花やかに穂に現はれぬ。



わかれ

別れぬ、二人。魂合ひし身は、常世にも  
離れじとこそ悶えしか、そも仇なりき。  
落葉もかくぞ相舞に散りはゆけども、  
分ちぬ、風は追わけに。さて見ず知らず。

幻なりき

幻なりき、事映の消えゆくにこそ、  
御賜のふゆの、かつがつに目耀ひ初むれ。  
ああ神無月、木叢なる葉ぞ散り透きて、  
濃青の空の微笑ひ、然はほのめきつ。



月見草の歌へる

夕ゆふづく日ひ黄金こがね羽はぐるま、  
海うみの宮みや今いまかも沈しづめ、  
天あまつ軋きしみ。

野のづかさの草くさの淺あさみに、  
まどろみの夢ゆめ路ぢは覺さめぬ、  
目めこそひらけ。

夕ゆふ霧きりは、身み様さまたゆげに、  
目め馴な樹ぎの木こ叢ぐらにまきて、  
うしろ袈け裟さに。



青羽木菟、又枝低に、

月眠り、言葉ずくなの

宿居すがた。

静けさの野によみがへる

青をみな身や幸魂の

月見小草。

見よ、かなた、森の木の間、  
うは白み、——ああ月白の  
にほひ灰に。

いま、樹々の片枝の青み、  
やがて、野のしろがね色や、  
被衣兄姫。



ぢきたりず花の瞳子は、

日にあきて、日にしも笑みぬ、

紅顔童女。

似ず、わなみ若尼御前の、

夜籠りに、ささらえをとめ

見こそ惱へ。

身ぞ、姫が丈の垂り髪

花鬘、しづくや凝りし

こゝろまどひ。

姫か、また魂のおほ宮、

常世邊や、無上涅槃の

嚴のむしる。



焚きしむる花の夢は、

夜の、やがて吾が世黄金の

齋ひ火盤。

くゆり香は、莖葉に蒸して、

聖り世の初夜の精進、

齋場浄め。

静こころ、下にゆらぎて、

魂むすび、——思ひぞあがる

酔ひの今や。

野の老狐踏みは折るとも、

えやは朽ちめ、身よ弱草の

聖ごころ。



野菊の歌へる

咲きいでて今日しも七日、  
野茨の薊にしまじる  
うまれ拙な。

つまどひの京をんな鷓  
黄脚踏む下にも折れて、  
莖葉かがむ。

神無月、入日の淡さ、  
しくしくと光はにじむ、  
臂の痛み。



彼處、いま花はひからび、

香は朽ちて、老がれ鳴るや、

河原よもぎ。

ここに、また根は覆へり、

亂り尾の苦參こそ寝れ、

腕だるに。

草絡み、落葉の反に、

熟白英、ぬる火の雫

實こそつゆれ。

今はとて、占野の歌女

蟋蟀は、絃をゆるめて

入るや、培土。



寂しさは墓のふかみに、

あな聞きぬ『宿世』の脚の

忍びありき。

歸依の根を延げばや下に、

戦慄の今はも、阿摩へ

かへる心地。

夢ざめしをり

夢ざめつ、——今はた聞きね

眞白げの眠りの退羽、

羽ぶきゆくを。



夢か、——さは、わが世の刈野、

片日向、小春日和の

日かげぬるに。

過ぎ去りし日の事榮は、

刈株の芽生を伸して、

花こそ咲け。

花よ、黄のかをりに蒸して、

遠佛や、童すがりの

一は、『歸依』に。

花よ、火の雫に燃えて、

下こがれ、葉がくれ朽ちし

『戀』は、朱に。



あるは、葉の煽りのひまに、

しら笑ひ、——似非方人や、

『幸』の白み。

あるは、眼のまなじり濕み、

うなだるる面ざし、妖の

『才』の青み。

また、蔭に蜘蛛網弛みて、

『過去』や、足高蜘蛛の

冷えし死骸。

葉の緑、ふとこそ萎えて、

しをれゆく、——わが世は鈍の

藤衣の窠れ。



青<sup>あを</sup>びるる身<sup>み</sup>よ、朽<sup>くち</sup>尼<sup>あま</sup>の

老<sup>おい</sup>ほけて、見<sup>み</sup>入<sup>い</sup>るし<sup>し</sup>ばしを、

魂<sup>たま</sup>も瘠<sup>や</sup>せぬ。

鈍<sup>にぶ</sup>の色<sup>いろ</sup>、ややに薄<sup>うす</sup>れて、

初<sup>はつ</sup>びかり、——あ<sup>あ</sup>あ曙<sup>あけぼの</sup>や、

目<sup>め</sup>こそさむれ。

明<sup>あ</sup>けわたる光<sup>ひかり</sup>の野<sup>の</sup>こそ、

「當<sup>たう</sup>來<sup>らい</sup>」や、わが新<sup>あたら</sup>身<sup>み</sup>の

嚴<sup>いづ</sup>の真<sup>ま</sup>屋<sup>や</sup>に。

初<sup>はつ</sup>びかり、げに常<sup>とこ</sup>春<sup>はる</sup>の

かなた見<sup>み</sup>て、躍<sup>をど</sup>りぬ、胸<sup>むね</sup>の

聖<sup>ひじり</sup>ごころ。



海のおもひで

一

夕浪ゆふなみ倦うみぬ、——さこそ吾われ。

眞白羽ましろばゆらに颯ひらへりし

鷗かもは水脈みづに、——さこそわが

魂たまよたゆたに漂たなへれ。

二

嘆なげきぬ、葦あしはうら枯かれの

上葉うへばたゆげに顛ねなきて。

昨日きのうは、ともに葦あしかびの

若わかき日ひをこそ歌うたひしか。

三



あな火ぞ點る、夕づゝの  
葦間にひたる影青に、  
消ゆとは知れど、さこそ、われ  
人のまみをば思ひづれ。

はこやなぎ

かかる夜なりき、白楊  
うるみ色なる月かげに、  
飽かず別れて立ちかへり、  
抱きあひては嘆きしが。



二

その夜は、やがて尼ごろも  
魂ぞ着そめし日のはじめ、  
齋きし「戀」のゆまはりは、  
寂しかりきな、人知れず。

三

天なる嚴の御苑にも、  
ありや、紀念の白楊、  
ひと夜は、かくや木がくれに、  
現身の世も見たまはめ。



難波うばら

一

いま月つきしろの上うへじらみ、  
 ほのかに動あぐ宵よひの間まを、  
 人ひと待まちなれし眞ま籬かき根ねに、  
 難なに波は薔るば薇ちぞ香かににほふ。

二

待まつにし來きます君きみならば、  
 千ち夜よをもかくてあらましを、  
 忘わすれてのみは、いつの代よも  
 めぐり會あふ日ひはなかるべし。

三



ひとの御胸にはなるとも、

『戀』はひとりぞ羽含まめ。

日のはじめより泣き濡れし

宿世は似たり花うばら。

白すみれ

忘れがたみよ津の國の

遠里小野の白すみれ、

人待ちなれし木のもとに、

摘みしむかしの香にほふ。



二

日は水の如往きしかど、  
 今はたひとり、そのかみの  
 心知りなるささやきに、  
 物思はする花をぐさ。

三

ふと聞きなれししるがねの  
 聲ざし柔きしのび音に、  
 別れのゆふべさしぐみし  
 あえかのみみも見浮べぬ。



都大路

一

臨時りんじのまつり事ことはてて、  
 都みやこおほ路ぢも數かずへ日ひに、  
 うら寂さびびゆくか、——昨日きのう今日けふ  
 さこそは似につれ、わがおもひ。

二

かつては、瑞みづの彌や木き榮はこに、  
 葉は守もりの神かみも夢ゆめみしを、  
 木陰こゝろ路ぢよ、今いまは「追懷おもひ」の  
 落葉おちのみこそ伏ふし沈しづめ。

三



その葉の亂れ、ひとつびとつ  
まるびつ、舞ひつ、片去りに  
やがては失せぬ。——さこそ、わが  
忘れずの日も往き消えぬ。

希望

日は水の如、事榮のおち葉を浮けて、  
流れぬ。やがて冬は來ぬ、熟睡ぞせまし。  
身は河ぞひの白楊、またひこばえて、  
常夏かげの花苑に新葉はささめ。



聖り心

矢の根を深み、創手より聖りごころは、  
 日に夜に、絶えず濃沸きて流れぬ神に。  
 青水無月の小林に、漆樹は、さこそ  
 木膚の目より美脂をしぬに滴つれ。

新生

悲しかりきな、さあれ、また下に隠るる  
 おほみ心も掬びえて、よみがへる身の、  
 今はた、などや堰きあへぬ涙か。——さなり、  
 沖つ嶋わの潜き女が、手に阿古屋珠  
 擁きて浮きし濡髪ぬれかみの、これや、したたり。



樹の間のまぼろし

一

葉こそほるれ、神無月、  
 かかる日なりき、  
 黄櫨の木かげに俯居して、  
 戀がたりする人も見き。

二

葉こそほるれ、午さがり、  
 かかる日なりき、  
 かたみに人は擁きあひ、  
 接吻にこそ酔ひにしか。

三



葉こそこぼるれ、そのかみの

二人のひとり、

ふとありし日のまぼろしを、

吾かのさまに見惚けぬる。

片かづら

—

相見そめしは、初夏の

空も夢みる御生の日、

冠にかけしもろかづら、

紀念にこそは分ちしか。



二

後の逢瀬はいつはとて、  
泣き濡れぬ日もなかりしを、  
はては召されて天つ女の  
空のあなたに往きましぬ。

三

いかに紀念の葵ぐさ、  
のこる桂は乾からびぬ。  
さこそ心も青枯れて、  
『追懷』のみぞ香ににほふ。



忘れがたみ

一

こよひ天あめなぬ花苑はなぞのの  
 美うまし黄金こがねのおばしまに、  
 夜よすがら君きみや立たすらめ、  
 すずろに胸むねのときめくは。

二

言いへばえにのみ打過うちすぎて、  
 さては別わかれし人ひとなれば、  
 さしも嘆なげきに浮うくぞとは、  
 夢ゆめにもいかで見たみまはめ。

三



忘れがたみの『追懷』は、

密ごころのふところに、

小野の月映うるむ夜を、

空のあなたにあくがれぬ。

枯 薔 薇

—

乾びぬ、薔薇あかねさす

花の若えはおとろへぬ。

今はのきざみ、ため息の

香こそ仄めけ、くちびるに。



二

愛<sup>め</sup>でのまどひに、何<sup>なに</sup>知らず、  
 面<sup>おも</sup>がはりせし人<sup>ひと</sup>妻<sup>つま</sup>の  
 まみの窠<sup>あな</sup>れに消<sup>き</sup>えのこる  
 日<sup>ひ</sup>のなまめきを見<sup>み</sup>浮<sup>うか</sup>べつ。

三

ふとまた聞<sup>き</sup>きつ、榛<sup>はしば</sup>樹<sup>き</sup>の  
 縷<sup>いと</sup>葉<sup>は</sup>こぼるる木<sup>こ</sup>がくれに、  
 人<sup>ひと</sup>しれずこそ、會<sup>あ</sup>ひし日<sup>ひ</sup>の  
 忘<sup>わす</sup>れて久<sup>ひさ</sup>のささやきを。



戀のものいみ

一

尼額あまびたひなる白鳩しらぼとの

朱あけなる脛はざに結ゆひぬとも、

心こころは往ゆかじ、君きみが住すむ

そらのあなたの御苑みそのへは。

二

こよひ濕うるめる夕月ゆづきの

人ひと酔よはしめの寂さびみに、

そことしも無なきささやきの

慣なれし色音いろねに聞ききとれつ。

三



君きみます方かたにあくがれて、  
齋のほはる戀こひをいとほしみ、  
胸むねなる齋屋のやにしのび來きて、  
吐息といきかすらめ天あまをとめ。

小木曾女の歌

いまはた残のこるおもかけの  
夢ゆめとはなしにささやくは、  
明日あすをもかくや夕ゆふづけて、  
峰越やまこしの路みちに待まちたまほし。



二

きのふは、御手よ淺間野の

『水無月』姫の鈴まうし、

木の間まにゆらぐ鈴蘭すずらんの

美うましかをりに染しみましき。

三

こよひは、髪かみのかかりばに、

朝露あさづゆしろき甲斐かひが根ねの

山やました小野せのに咲さき濡ぬるる

十六夜いざよひ薔薇ばらの香かを嗅かぎぬ。

四

路みちゆきぶりに、遠とほつ野のの

顔佳かほよの花はなは摘つますとも、



小木曾の山のえぞ藁すみれ

あえかの色いろもわすれざれ。

夏の朝

かた岡おかに、

日は照てりぬ、

男木おとぎの枝えだに、

鳥とりうたひ、



いさら水みづ

笑わらみまけて

面おもてはゆに

野のこそ滑すべれ

朝あさ踏ふます

風かぜの裳もに

草くさかた葉は

さゆらぎて

しづれ散ちる

露つゆや、げに

玉たまゆらの

瓊じゆ音ねすらめ

雲くもは、いま

しるたへの



羽を伸しぬ、

朝發き、

海原に、

帆をあぐる

蟹舟の

心みえや。

郎女の

しろ装ひ、

あな「朝」か、

童げに

かた笑みて、

つと消えつ、

「日」はすでに、

牧に立ちぬ。



さざめ雪

夕凍ゆふじみの

小野をのや、伏目ふしめに

さしぐみし

日はみまかりぬ。

左視ひだりみ右顧みぎかん

あな細雪さざめゆき、

常樂じやうらくの

宮みやとめあぐみ、

ものうげの

旅たびや、はつはつ。

ここ、かしこ、



榛實の殻

また乾反る

伏葉のみだれ

小木の枝に

鷓竊りて

あな、ここは

悲びの邦

鈍色の

住家ならまし。

ささやきつ、

また吐息しつ、

雪片の

嘆きよ、——落ちて、

葉に、石に

凭ひぬ、倦みぬ、



またたきて、

つとこそ消ぬれ、

いささめの

生命か、——濕うるひ。

烟

燃えつや、黄櫨わうじの乾反葉けんはんはに、また橡つるばみの

爆實ばくみの殻からに。——今ははた、

鈍色にびいろ被衣かづき身みぞたゆげに、

荇野かひのに凭いとひ、隠こもり沼ぬの水み澁しぶに浸ひたり、



伏木に添ひて火移りの昨日を夢み、

冷かの今に涙ぐみ、

もの倦がほにたゆたひつ、迷ひつ、聴て

木の上枝より細高に、い行くか、烟

ありなし雲とたゞよひて、

天のところに溶け入りぬ。

寂寥

宿直やつれの雛星は、

暈たゆげにまたたきつ、

竹柏の老木は、寝おびれの

夢さわがしく息づきぬ。



夜はもなか、

吾ぞひとり、

かすかに物のけはひして、

ささやく心地、さびしさの

香にほのめきて身にぞ泌む。

隠り沼

初冬の日はたそがれぬ、

隠り沼や、山田の乳媪、

おもひでの吐息かすけき

面やつれ。



葉はずくなの並なみ木の路みちに、

黄あめまだら足あし惱ゆむ牛うしは、

夕ゆふ霧きりの鈍鈍にかくれつ、

蹄ひづめおもに。

荇かり小田をたの目路めちや、さながら

齋いはひ兒この葬式ほうしのゆふべ、

跡あと淨きよめ、——柱はしら隠かくれに、

居ゐよるこころ。

涙なみだぐむ小こ木ぎの翡かほ翠そび、

初はつ立たちし巢すや見み忘わすれし、

ものうげに、つとこそ移うつれ、

あなたさまへ。



夕凝の岸のくづれに、

かさこそと、河原菅菜の

これや、はた老いにし夏の

夢のひびき。

佛生會、生日の日なか、

花浮けし胸に、こよひは

野の柳 姫が落髪

葉ぞひたりつ。

寂寞や、「昨日」は逝きぬ、

『明日』はまた虚音に似たり。

失心なる『今』になづみて、

水かよどむ。

しだらなの眞菰のなかに、



水漬く火や、今宵も星は、

乗燭の火影に、天の

戸こそまもれ。

水泥なす闇き胸にも、

常ひさの光の映や、

たゆげなる笑青じろに、

沼ぞ皺む。

江ばやし

しろがねの角がむり、

あえかなる月しるや、

眼ざしは、天つ阿摩の

慈悲とこそ滴れ。



水鏡みづかがたの香かくゆる夜よを、

江林えはやしのたたずまひ、

さびしらや、齋居いもみ精進しょうじん、

木木きぎの息いきしのびに。

蝙蝠かほひりはうつほ樹きに、

膜あまくはか味あじ嘗なむる。

妖惑まよほしの羽搏はうち絶たえて、

しめらへる樹間このまや。

葉はのひと片へつぶやき、

ふた片へまたささやく。

ありし日の榮はえや、さこそ

鷺脚さぎあしに落おつらし。



あな解脱、——さばかりの  
嚴の夜の氣深さに、  
ともすれば、女が吐息の  
なよびこそ灰見れ。

睡蓮の歌

水うはぬるむ水無月の  
夏かげくらき隠り沼に、  
花こそひらけ、觀法の  
目を睡蓮のかた笑ひ。



しろがね色の花萼に、

一炷のかをり焚きくゆる

薬は、ひめもす薰習の

沼の氣に染みてたゆたひぬ。

たたなはる葉のひまびまに、

ほのめきゆらぐ未敷蓮の

ひとつびとつは後の日を

この日につなぐ願ならし。

夕となれば、水がくれの

阿摩なる姫がふところに、

ひと目を、やがて現想の

うまし眠りに隠るひぬ。



沼にひとりなる法子兒の  
翡翠ならで、くだちゆく  
如法闇夜に、睡蓮の  
聖り世を、誰がしのぶべき。

海のほとりにて

鈍なるみ空、鈍なる海、  
ああ身ぞひとり、  
入波ゆたにたゆたひて  
ゆふべとなりぬ。



氷雨の海の海神は、

椰子の實熟るる

常夏かげの國戀ひて、

胸さわぐらし。

沖の遠鳴潮の香、

ああ酔ごこち、

いづくは知らず、靈魂の

故郷こひし。

わが世は知らぬかなたへと、

日に、また夜はに、

あくがれまどふ野心の

努力の羽搏。



「時」は頓死れて死にぬとも、

遂の日までは、

常若にしもあらまほし、

わだつみとわれ。

知らぬかなた

—

小野の菫生の葉がくれに、

乾田の穰のしたぶしに、

鶉は夢をはぐくみぬ。

さこそは似しか、そのかみの



たもとほりにし日の戀は。

二

紅顏嬢子のましら手に、

ゐよりし宵はくちづけの

香をしも愛でき。さあれなほ

魂はしのびに吐息して、

知らぬかなたにあくがれき。

三

今宵かすけき囁きに、

ふと聞き惚れて涙ぐむ

心は知らじ、嘗てだに。

そことしも無きかなたこそ、

また追懐のそのかみに、



夕とどろき

一

新月ゆよづきさしぬ、物ものの香かの  
 ほのかに薰くゆる五月さつき野のに、  
 夢ゆめかのわたり、都邊みやこべの  
 夕ゆよとどろきに聞ききとれぬ。

二

嘗かつては、吾われもなよびかの  
 あえかの人ひとと相あひ知しりて、  
 世よにうつくしき事こと榮はえの  
 あまた夜よにこそ醉ゑひにしか。

三



日は往き消えつ。今もはた  
かすかに残るおもひでの、  
何とは知らず夕ごゑを  
吾かのさまにさしぐみぬ。

涙の門をゆきすぎて

涙の門をゆきすぎて、

わが家居こそそこにあれ、

『笑ひ』の花も、『嘆かひ』の

垂り葉も生ひぬ夕庭は、

涙の門をゆきすぎて



椽色の被衣して、

墳墓の如しめやぎぬ。

涙の門をゆきすぎて、

そこに『沈黙』の樹こそあれ、

しろがねの葉のした蔭に、

『思慧』の木の實を採り食みて、

生は榛實の虚の實の

『寂み』をのみ味ひぬ。

涙の門をゆきすぎて、

神こそ坐せれ、古御達、

天つ御宣の老舌に、

ひと日は、知らずつらかりし、

さあれ、風雅に數奇なりし

運命神をこそは忍びしか。



\* 朝顔姫の嘆き

黄金樞の音こそすれ、  
いま『曙』のいでますと、  
天の御蔭の一の門は、  
戸をかもあくる。

どよみは胸を拵きて、  
日の追懐ぞめざめぬる。  
ああ曙や、なつかしき  
唐棣のころも。  
さしぐむ目の濕ひに、  
目耀ふ天の羽ぐるまや、



ああ曙のうはじらむ  
唐棣のころも。

美しかりしそのかみの  
夢の香ほのに身に泌みて、  
手弱腕の卷鬢ぞ、  
わななき撓む。

天の御蔭の宮づとめ、  
朝顔姫の名に呼ばれ、  
七座す星の群にして、  
舞ひしやむかし。

おほみ淵酔の良夜に、  
日子に婚ひてし日の初め、  
嚴のむしろを禁められて、



花とし生ひつ。

花とを咲けど、『くらやみ』の  
牢獄の窓に俯居して、

ああ曙や、夜もすがら

君をこそ待て。

君を待つ間をゆるされに、

天の足日をかいまみる

ありなし時や、せつなさの

心もすずる。

はかなき今の身柄には、

ひかりは久に堪へなくに、

ああ曙や、まばゆさに、

目こそ盲ひぬれ。



黄金向日葵日移りに、  
日の轍をこそ趁ふといへ、  
わなみ盲目のうなだれて  
方もぞ知らぬ。

『悲愁』は若き孕婦にて、  
日なみに五百の眼をはらみ、

ああ曙や、目伸して  
君を待たまし。

\* 朝顔姫は七夕七姫のうちの  
ひとりなり



\* 筑波紫

夜は明けぬ二の新代の朝ほらけ、  
 國の兄姫の長すがた富士こそ問へれ、  
 しるがねの被衣も搖に、「やよ筑波、  
 八十伴の緒は玉ぶちの冕冠も高に、

天の宮御垣は守るに、いかなれば、  
 異よそほひの東人と、汝やはひとり、  
 玉敷の御蔭の庭も見ず久に、  
 下なる國の暗谷につくばひ居るや。』

筑波根の東聲して、「天の宮、  
 御使ひ姫は汝こそあれ、われは國造、  
 高翔くる日の羽車をともなひて、



朝なゆふなに七度の國見の反身、

「汝が希望、あくがれ、吟詠、高わらひ、

努力、若やぎ、また愛の華座はここに。」と、

むらさきの常若すがた花やかに、

ほにこそ揚ぐれ、人の世の、あはれ烽火を。」

\* 詩集『筑波紫』に序す

\* 樂のすずろぎ

衣かづき腕たゆげに、

夕月は門にこそるよれ。

静寂は清み酒の如、

野も山もねむげに酔ひつ。



ひともとの河原赤楊、  
うなだるる下枝の梢、  
四の緒は風に歌へり、  
しろがねの音色もゆらに。

『わが絃の一には、天の  
飛車星のどよもし。

二の緒には、青うなばらや、  
海神の浪のゑわらひ。

『三の緒は、瑞樹のかくれ、  
たわや女が夏の夜の夢、  
四には、はた巖根の小百合、  
あけぼのの香のささやきを。



『今宵しも思ひあがりつ、  
 美し音は神もこそ聞け、  
 常樂界のはた黄泉の  
 魂むすび、——今暫の間を。』

琴の音は低にゆるびぬ、  
 ああ今か、小野の草だに、  
 奇し御靈葉にもゆらぎて、

静歌の音にはたつらぬ。

\* 詩集『四の緒琴』に序す



\* 藝のゆるされ

立樂の節はたゆみぬ聞きねいま  
御蔭の庭に羽ばたきのはたと響みて、  
セラヒムの聲こそわたれ、「天つ世の  
生日足日や、事榮に酔ひさまたれぬ。

合奏の美し音色に聞きとれし  
心あがりの、やがてまた見がほしとこそ  
見ざらめや、御門柱の彩畫にも、  
天つ顔ばせ、大御身の嚴のひかりを。

やをれ、今天路に虹を、野に花を、  
眞闇に星を、黎明の空をあからめ、



わだつみの浪をいろどる選人を

召せよ。』とあれば、二の大門からりと鳴りつ。

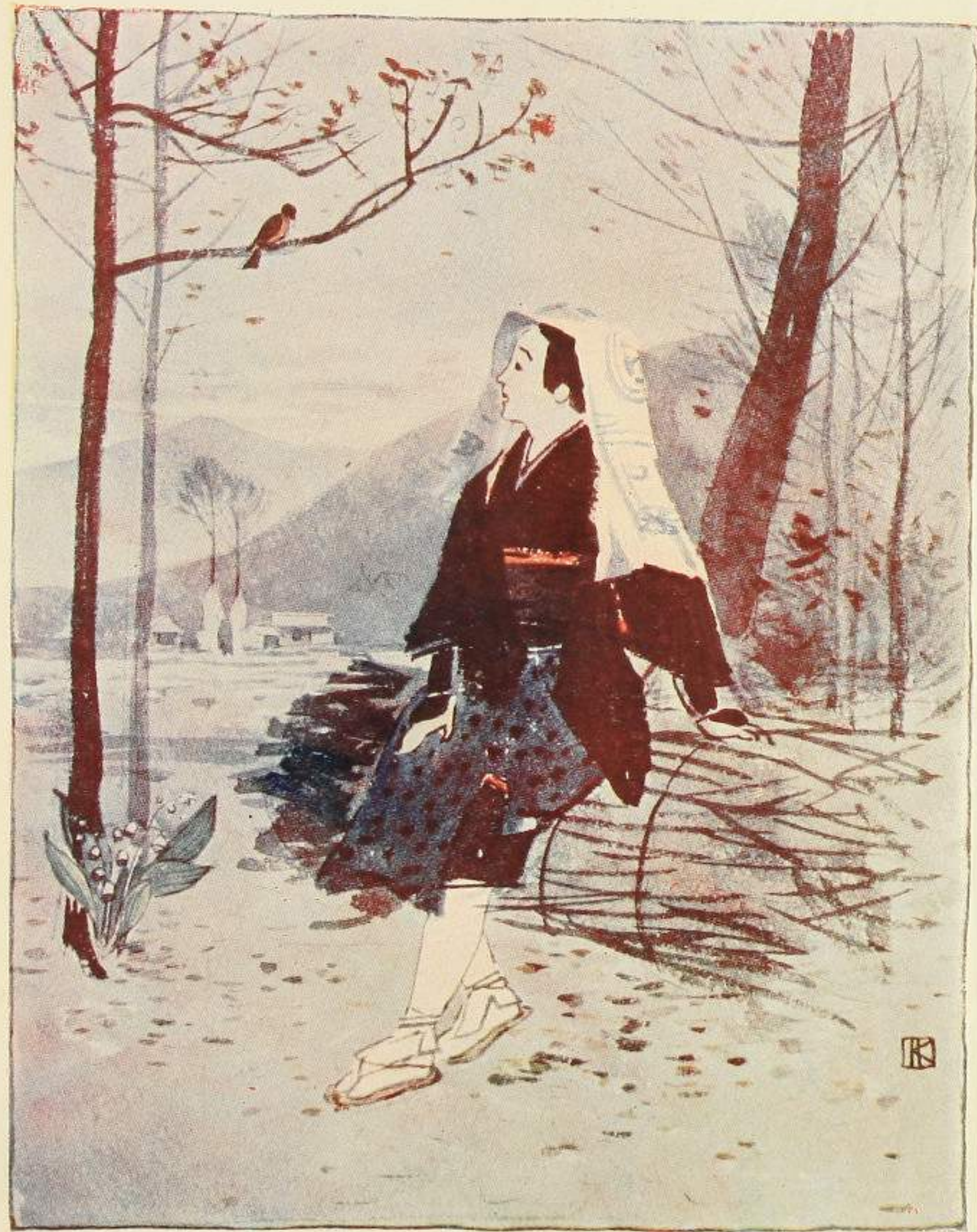
しろがねの樞はきしり、諸とびら

つと離るるや、階を繪師はあがりぬ。

\*『太平洋畫會畫集』に序す







『太平洋畫會畫集』に序す

わだつみの浪をいろどる選人を

召せよ」とあれば、二の大門からりと鳴りつ。

しろがねの樞はきしり、諸とびら

つと離るるや階を、繪師はあがりぬ



鈴蘭の歌

—

「深山みやま 檜しのの枝えだにも、

花はなはほのかにくゆる日ひを、

日雀ひから、日雀ひから女め、そなたには、

母御ははごが無ないか、子こが無ないか、



何故に色音の濕るや。』と、

さつさいよこの、

小木曾女。

二

「母も知らねば、子も有たぬ、

たつた一人の夫鳥を、

鷹にとられた日の初め、

歌の若えは忘られた、

嬪の鳥の身ぢやまで。』と、

さつさいよこの、

日雀女。

三

「雀がくれの狩場に、

黄脚鳴もや裏ぎりて、



さは囚はれの、——日の後は、

野木の古巢のおもひでに、

泣き濡れてのみ過すや。」と、

さつさいよこの、

小木曾女。

四

「夫に別れたまたの朝、

餘り戀しさを、會たさに、

黄櫨の木立の山ごえを、

鷹師のもとに訪れて、

許されもこそ嘆いたに。」

さつさいよこの、

日雀女。

五



深山の鳥も悲しびの

酒甕に醜むしたたりに、

酔はざなるまい術なさか、

いづれは若い身の性の、

さても相似た宿世や。」と、

さつさいよこの、

小木曾女。

六

『鷹師の君の言やるには、

幸は市女にひさがれて、

肴にもこそなれ、其方には

代やまゐると啄ばみに

やがて取せた草の實。』と、

さつさいよこの、

日雀女。



七

『深山姥の使ひ姫、

鶯が落した蠱の實の

粒のひとつや含まれて、

野木の又枝の巢ごもりに、

芽ぐむや、禍の妖惑』と、

さつさいよこの、

小木曾女

八

『狐にかくれて、切畑の

片日向にもおろしやれ、

木の葉ごろもの山姫の

袖をこぼれた實ぢやまでに、

あり慰めにまゐらす。』と、



さつさよこの、

日雀女。

九

『草くだものの償ひに、

秋のとまりの神無月、

末枯を小野に齎らする

『日』は鈍の葉もはぐくみて、

咲いたか花の忘れぐさ。』

さつさいよこの、

小木曾女。

一〇

『山した小野は、羅漢松の

老木のもとに實を蒔いて、

花のしづくに濕すまに、



芽生は日日に羽を伸して、  
やをら生ひ出た、鈴蘭』と、

さつさ、いよこの、

日雀女。

『あな憂と見たは、山姫の  
心しらひの戯れか、

一一

小木曾をとめの身柄には、  
また見るものか、鈴蘭の  
名は幸福のよみがへり。』

さつさ、いよこの、

小木曾女。

一二

『木の叉枝に俯居して、



日にまた夜の齋戒に、  
 つと幻まぼろしのほのめいて、  
 白しろよそほひの郎いらつひめ姫、  
 花はなは笑あはみそち、一いちの花はな。』  
 さつさ、いよこの、

日雀女。

一三

『ああ、よみがへる歡喜よろこびの

日ひの前まへ申し、鈴蘭すずらんの

ひとつびとつつの花はなびらに、

黄金こがねの文字もじも見みやらぬか、

『あり待まちつ戀こひの齋戒いまい』と、

さつさ、いよこの、

小木曾おぎぞう女。



一四

「待よるこびや、またの日は、

紅顔をとめの曙が、

山した小野の朝踐に、

玉裳のすその香にしみて、

花は咲きそる、二の花。」と、

さつさ、いよこの、

日雀女。

一五

「また笑みそめた垂り花の

麻の葉形のくちびるに、

天の醗酒を味嘗めて、

聞きやらぬかの、囁きを、

「齋はる戀の淨まり。」と、

さつさ、いよこの、



小木曾女。

一六

汲むにまかせた大甕の  
 深げの世かな、あり掬ふ  
 辱なさにさしぐみて、  
 あり木の枝の葉がくれに、  
 今日もこそ待て、三の花。』

さつさ、いよこの、

日雀女。

一七

『ひたぶる心 汝が眼には、  
 花は天路の熒惑星、  
 明日は莖葉の三の座に、  
 巖のひかりも見るわいな、



『浄まる戀のゆるされ』を。

さつさ、いよこの、

小木曾女。

『花を待ちみる事榮に、

さこそは齋へ、ともすれば

青水無月の小野の香に、

むかしの夢のうらびれて、

古巢を見てはさしぐむ。』と、

さつさ、いよこの、

日雀女。



三の百合

やをれ、此方様、初夏の  
永い日なかを何處へ往こ、  
ぬるむ小河の水こえて、  
向うお山へ花折りに。

花は何ぐさ、山の百合、  
瑞枝しだれた秦木皮の  
蔭にひとと手折りては、  
知らぬ『往時』にたてまつり。

深山頼白鳴きかへる  
十六夜薔薇の葉がくれに、



またもひと本見出しては、

『今日』を祝ひの花の環に。

一はかざしに、二は胸に、

さては御手に、『ゆくすゑ』の

あらまし事の願ひにと、

参らす花のあらばよい。

あかつき露のうは濕り、  
まだ乾ぬ森のした路を、  
眞保良の奥にわけいれば、  
深山がくれの戸が見ゆる。

『夏野の姫に物まうす、

牧のをとめに、ひと莖の

花を。』と門をそたたけば、



からりと開いた闇の宮。

宮の闕のかたかげに、

白よそほひの立すがた、

えならぬ香にも仄めいて、

咲いた、あえかの山の百合。

姫が御賜の花やとて、

心いそいそ寄るとすりや、

思ひもかけぬ尾鳴しの

蛇が見えそる、葉がくれに。

花は折りたし、蝮の

葉守のまみは見憂いし、

浅野に百合は咲くまいに、

何を様にはまゐらさう。



ついと強往く手さきに、  
蛇はぬる火のかつ消えて、  
闇のあなたに、ほのぼのの  
花や、——と見れば夢わいな、

山毛櫨の瑞枝の下蔭で、  
様にもたれて眞白百合、

一はかざしに、二は胸に、  
三は御手の手のひらに。



雛罌粟

花を、いよこの、植ゑやれ、  
 花を植ゑやれ、雛罌粟を。  
 罌粟の、いよこの、脆さに、  
 罌粟の脆さに、そのかみを。

小雀と桂女

—

別れた人に會ひたさに、  
 今日も野へ來た桂女は、  
 路の瑞樹の葉がくれに、  
 聞きこそすませ、美し音の



さつさいよこの、

小雀女こがらめ

二

『やをれ小雀女こがらめ人ひとの子こは  
思おもひしをれて嘆なげく世よを、  
其方なたはひとり心安やすに、  
咏ながめ聲こゑしてさへづる。』と、

さつさいよこの、

桂女かづらめ

三

『あいな頼たのみの世よに倦うみて、  
夜よを泣なき濡ぬれた身みならでは、  
鳥とりの咏ながめる静歌しづうたの  
小野をのの調しらべは淡あはかる。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

四

『いく夜をひとり泣き濡れた、

小野の尼とは知るまいし、

日のしづけさを木がくれに、

むかし語りに耽りやれ。』

さつさいよこの、

桂女。

五

『曾ては、深き青山の

老木の枝の巢ごもりに、

つがひの雛を羽ぐくみて、

夫を待ちゐた日もそろ。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

六

『夫は巢立の子もつれて、

深山つぐみの來ぬひまを、

老の峠の切畑に、

黄金覆盆子や摘みやる。』と、

さつさいよこの、

桂女。

七

『ひと日樹の實を啄ばむと、

谿のまほらへ降りたまま、

山の姫の蠱ものに、

夫は迷ひてかへらぬ。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

八

『さては童男と魅されて、  
隠れの宮に、しろがねの  
手瓶や日毎たづさへて、  
蠱の眞名井も掬むやら。』と、

さつさいよこの、

桂女。

九

『明けたひと日を夫どひに、  
野にまた山に鳴いて來りや、  
巢は覆されて、驕だれの  
鳴音はまたも聞かれぬ。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

一〇

『さても憂事強つとみられの

重荷おもひに小附こつけ、葉はがくれに、

母ははの居ゐぬ間まを、蝮くちばみの

窺うかが視しひ來きたすさびや。』と、

さつさいよこの、

かつら女。

一一

『ひとり居ゐ馴なれた木きをおりて、

み山やまの谿たにに落おちゆくに、

尾羽おしほは憂身うれしみをさへぎりて、

またあり悟もどく、わが世よに。』と、



さつさいよこの、

小雀女

一二

『天ゆくからに、險路にも  
打たざなるまい羽搏とは、  
さても相似た人の身の  
もてなやましの心に。』と、

さつさいよこの、

かつら女。

一三

『はては山へは歸るまい、  
野こそは吾家、また墓と、  
國原めぐる鶉立ち、  
旅の八百日の寂しさ。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

一四

「知らぬ遠方のさすらひは、  
路さまたげも多かるに、  
さても事無に世をし經て、  
春を野木にも轉る。」と、

さつさいよこの、

かつら女。

一五

「ひと日本原に往き合うた、  
小野の兄姫にとめられて、  
あすは檜の小林に、  
今も巢こそは營め。」と、



さつさいよこの、

小雀女。

一六

『さは許されの事榮に、

夢か『往時』は今もはた

牧の小笛にしをびては、

嘆きやるかの、さすがに。』と

さつさいよこの、

かつら女。

一七

『されば御空のたたずまひ、

野のあけくれを見知るほど、

心いられは調ひて、

昨日には似ぬ心地や。』と



さつさいよこの、

小雀女。

一八

『さては、揺えた當時の  
魂のたゆたひ和ぎしづむ  
眞澄の今のしづけさに、  
見やるは何か、新に。』と、

さつさいよこの、

かつら女。

一九

『まだうら若いこの世には、  
健か心いそしみて、  
嘆きの鈍衣を脱ぎすべし、  
あなたの空へ外寄るに。』と、



さつさいよこの、

小雀女。

二〇

鳥のさとしは然りながら、

なほ下心どこやらに、

うけひき難い心地して、

今は別れた野の路を。

さつさいよこの、

かつら女。



白羊宮畢

四九 四六 四六 四五 三七 三五 三一 一五 一五 一四 一三 九 七 頁

七 七 一 三 八 四 三 七 二 六 五 五 行

装ひ	若人	君、 わかうと	塔	緒合せに、	樟實	吹咳	然は、	青に	日は、	世に、	静ころろ	齋ひ瓮に	誤
装ひ	若人	君、 わかうと	塔	緒合せに	樟實	吹咳	然は	青く	日は	世に	静ころろ	齋ひ瓮に、	正

白羊宮正誤

一九二 一六八 一六六 一四六 一四三 一二六 一一〇 八七 六七 六三 五九 五九 頁

四 三 四 二 二 二 三 五 一 二 四 三 行

い行くか、	天なぬ	天	影青に、	新身	片眠り	十六夜薔薇	かなたへ いさよひはら	妖にそ	夕げえ、	あらびし	冬	誤
い行くか	天なる	天	影青に。	新身	片眠り	十六夜薔薇	「かなたへ いさよひはら	妖こそ	夕げえ	あらびし	冬	正



明治三十九年五月一日印刷  
明治三十九年五月七日發行



著者

薄田淳介

發行者

東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地  
金尾種次郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
佐久間衡治

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
株式會社 英舍

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地  
金尾文淵堂

白羊宮

金壹圓





文淵堂圖書發賣元



久留米市米屋町	菊竹金文堂	杉本	東區南渡邊町	東區佛光寺東入	京都丸通	星野文星堂	名古屋宮町一丁目	前川文榮閣	東京市京橋區中橋廣小路	東區海堂書店	東京市京橋區尾張町二丁目	北區隆館書店	東京市日本橋區吳服町	上田屋書店	東京市神田區裏神保町	東京堂書店	東京市神田區表神保町
---------	-------	----	--------	---------	------	-------	----------	-------	-------------	--------	--------------	--------	------------	-------	------------	-------	------------

明治三十九年四月改正

東京 金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽



宗 教 書 類

				<p>中村春雨 解畫 松井昇畫</p> <p>キリスト物語</p> <p>(新刊) 金拾二錢 郵稅</p>	<p>同</p> <p>舊約物語</p> <p>(近刊) 金壹拾錢 小包料</p>	<p>中村春雨</p> <p>新約物語</p> <p>(再版) 金壹拾錢 小包料</p>	<p>綱島梁川</p> <p>病間錄</p> <p>(三版) 金壹拾錢 小包料</p>
--	--	--	--	---	---	--	---

小 說 書 類

<p>同</p> <p>炬火</p> <p>(新刊)</p>	<p>同</p> <p>犯さぬ罪</p> <p>(近刊)</p>	<p>同</p> <p>雛鳩</p> <p>(賣切)</p>	<p>同</p> <p>無花果</p> <p>(十版) 金七十八錢 郵稅</p>	<p>中村春雨</p> <p>密航婦</p> <p>(新刊) 金七十八錢 郵稅</p>	<p>同</p> <p>秘中の秘</p> <p>(近刊)</p>	<p>同</p> <p>七日間</p> <p>(賣切)</p>	<p>菊地幽芳</p> <p>妙男</p> <p>(全冊) 金六十八錢 郵稅</p>
--------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	--	---	----------------------------------	---------------------------------	--



小 說 書 類

木下尚江	同	同	須藤南翠	柳川春葉	大倉桃郎	佐野天聲	巖谷小波
火	良	新	間	緣	琵	露	喜
の	人	曙	一	の	琶	の	劇
柱	の	光	髮	糸	歌	曲	七
(三)	白	(近)	(新)	(新)	(四)	(新)	草
金參拾五錢	(三)	各三十五錢	金七十五錢	金六十錢	金六十錢	金六十錢	(近)
郵稅六錢	各六錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	金七十錢
							郵稅不要

雜 書 類

五十嵐力	山路愛山	子規自筆
兒童	社會主義管見	俳人芭蕉
の		
研究		
(新)	(新)	(木)
金壹圓	金三十錢	金七十五錢
小包料拾錢	郵稅不要	郵稅不要



詩文畫集類

薄田泣菫 白 羊 宮 (新刊) 金壹圓 小包料拾錢

同 暮 笛 集 (三版) 金六十錢 郵稅六錢

同 白 玉 姬 (新刊) 金八十錢 郵稅八錢

同 行 春 (切品)

與謝野鐵幹 む ら さ き (切品)

同 與謝野鐵幹 昌子 毒 艸 (切品)

與謝野昌子 み だ れ 髮 (切品)

同 小 扇 (四版) 金二十五錢 郵稅四錢

詩文畫集類

與謝野美昌子 戀 ころも (三版) 金四十錢 郵稅四錢

ミラ 野口米次郎 劍 と 戀 の 日 本 (切品)

河井醉茗 塔 影 (新刊) 金四十五錢 郵稅六錢

鳥居君子 上 總 の や どり (新刊) 金二十錢 郵稅四錢

卅八年度白馬會紀念畫集 (新刊) 金九十錢 郵稅不要

小林萬吾 風 景 水 彩 畫 帖 (新刊) 金五十錢 郵稅不要



月 刊 書 類

島村抱月主幹

早稻田文學

每月一冊  
郵稅一錢五分  
金二錢

尾上新兵衛主幹  
鏑木清方

お伽世界

每月一冊  
郵稅一錢五分  
金一錢

丸山晚霞主幹

水彩畫講義錄

每月一回  
會費一錢  
郵稅五分



